

---

# ISの世界へ未元物質投下作戦！

架引

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ISの世界へ未元物質投下作戦！

### 【Nコード】

N2953U

### 【作者名】

架引

### 【あらすじ】

垣根帝督は、スクランブル交差点で一方通行に倒され、治療が間に合わず死んでしまう……が、何故かISの世界に転生してしまう。しかもそこは、何と篠ノ之束の移動用ラボの中だった！？  
科学と科学、未元物質とISが交わる時、物語は始まる！

## 出会い 改

「知らない天井だ……」

学園都市第二位のレベル5、ダークマター未元物質という超能力を扱い、アレ  
イスターIIクローリーの第二候補スベアフランであった、垣根帝督は、その部屋  
の全体を見渡して、思わずそうつぶやいた。

正直訳がわからない。

テレポーター空間移動能力者にも拉致られたか？ そう思うが、しかし記憶  
がはっきりしない。

どうしてここにいるのか、思い出そうとしても直前のことが思い  
出せない。

仕方なく周囲を見渡すと、自分が寝かされていたベッドの横に、  
何処からどう見ても冷淡な女性がいた。

「起きた？」

「ああ。……あなたは？ つかここは何処だ？」

「え……！？ 貴方……私を知らない……？」

改めてみるが……どこかで見たことがある顔付きだ。

「……………篠ノ之束か？」

「そう、その通り」

「……………で？」

「でって、あのねえ、それが「俺の超能力、ダークマター未元物質を開発したあ  
んたがいまさら俺に何の用なんだ？」……は？」

篠ノ之束という女性。彼女のことを垣根は嫌というほど知ってい  
る。彼の能力の開発に携わった重要人物なのだから。

だが、何処がおかしい。何故なら……。

「ちょっと待って。私は貴方のことを知らないし、ダイクマター暗黒物質の開発  
って何の冗談？」

「冗談？ 惚けるな」

「惚けてなんかいないよ！ 本当に見覚えも聞き覚えもないもの！」

それは一体どういうことだ！ と叫ぼうとしたところで、ふと視線の端に妙なものが移っている。

「……………あん？」

それはカレンダーだった。だが、カレンダーではあつたけれど、そこに書かれていたのは……、

「なん、だと？」

「……………え？」

最後にカレンダーを見たときの西暦から数百年後の西暦が、そこには書かれていた。

……………

それからお互いいろいろと事実確認をした結果、垣根が平行世界の未来に来てしまったことがわかった。

「じゃあ一通り確認するけど、貴方は過去から、それも平行世界の過去から何故かこの世界の、私のラボの中に飛ばされてきた、と」

「……………そうだ」

「で、平行世界にいた私は超能力の研究者で、貴方の超能力の開発

に携わっていた」

「……ああ。改めて見れば細かいところが違うがな……」

そう言っつて、垣根は束の頭を見た。

「主に地毛の色がな。あいつは染めてもいないのに妙に茶色かった」  
「そう。で……私が一番興味を示したのは貴方の能力ね。さっき見せてもらったけど、見事に解析不能だったわ。本当に、凄い。まだ発見されてないんじゃないかと、まったく考え方捉え方の異なる異質な物質だなんて……」

一応、この世界に存在しない物質だからな、と適当に受け流して、ため息を吐いた。

「本当に、マジで、いくら俺に常識が通用しないからって、これはあんまりだろ……」

だが、現実是非情で、この世界からあちら側に帰る手段があるとも思えない。何せ、超能力の理論のりの一画目すら登場しないのだから。

代わりに登場したのが、IS……インフィニットストラトスというパワードスーツだ。

ただ、これには垣根は若干興味を示した程度で、あまり気にしなかった。だが、それが原因で女尊男卑となっていると聞くと、退くことができなくなった。詰まるところ、ここで少しお世話になりたいということだ。

「……やっぱり平行世界だけあって、あんたは天災だな。何で好き好んで女尊男卑になる危険の高い兵器を作り出すかねえ……」  
「フフン……そうなの！ 私は天才なのだ！」

何を言われているのか、同音異義語、アクセントも同じという奇跡の重なりに気付かず、『天災』という侮辱を『天才』という称賛としてとってしまった束を見て、若干言葉を詰まらせた垣根。

だが、その次に発せられた言葉からは、さすがに若干の悔恨が籠っていた。

「……もとは宇宙開発向けのパワードスーツだったんだけどね」

「類は友を呼ぶのかね……いや、超能力開発の場合は最初からそういう意図だったから類が違うか……」

「どうということ？」

束はいきなり垣根がそんなことを言い出すので、素っ頓狂な顔で垣根を見た。

「いや、能力開発ってな？ 表向きには神ならぬ身にて天上の意思

にたどり着くものっていうスローガンがあるんだが、その蓋を外すとある人物が立てている悪質な計画の一端に過ぎないんだ」

「……何か、言ってることをそこはかたなく理解できた気がするけど、それって私を馬鹿にしてるよね？ さっきは天才って褒めてくれたのに」

「馬鹿が……本当に気付いてないのな、お前。俺が言ったのは同音異義だ。お前は見事に天の災いを呼んだってことだ。お陰で世界の人口の半数は不幸になっただろうが」

「……………」

さすがに言い返せないのか、束が言葉を詰まらせた。

垣根は『もう少し後先考えて公表しろよな』、と若干強めに言い放ったところで、会話が途切れた。

元の世界に帰れる保証がない以上、どうすることもできない。

世界が違えば、当然自分がここ最近目指していたものも不可能になった訳で。誰にあたってもし方なし、ならここで大人しく生活するしかないと勝手に結論づけた。

交渉という名の脅迫、もとい警告……を保険にしてくださいました要求

垣根帝督はISなるパワードスーツが蔓延る平行世界の未来へと来てしまった。

さらに何の因果か、そんな垣根を不本意にも『拾った』のは、垣根の超能力を開発した『篠ノ之束』と姓名性別が同じで、容姿や傾向すらも似通う人物だった。

その異質過ぎる能力ゆえに、垣根はそんな現状にもさして動揺を見せなかった。『もう少し後先考えて（ISを）公表しろ』ときつく言われた束も、気を取り直して、昼食の準備をしている。

昼食の準備をしだした束をみて、垣根は急に腹が減ってしまった。  
グギョルルルルルルル……と音を立てるほどに。

「クスツ……かわいい……」

「ム力ついた。流石は篠ノ之束。大したいらつきっぷりだ。過去最高だぜテメエ……。性格があのだマッドサイエンシストに似てやがるどころかそっくりだ！」

「それは愚問だと思うよ？ 平行世界で別の可能性を歩んだとはいえ、同一の人物何だもの。やってることは違っても性格がそっくりっていう可能性は十分ありえるでしょ？」

「そうかよ！」

しかし片や一度暗部に落ちて生活習慣や性格が狂った人間、片や興味を持った人以外に対し壁を作り、冷淡な態度で拒絶をする人間。その心は常人の持つものとは相容れない。



互いにそんなどうでもいいことは微塵くらいにしか思っていない。

二人が本気で考えているのは、今後のことである。

垣根としては、まずは衣食住を確保したいところだ。そして、ここでISの入手を確実なものとする。ISに興味はないが、恐らくは女尊男卑の原因たるそれを自身が扱えば大きなアドバンテージになる。だが、男性である垣根には今を逃すとISを『まっとうに』手に入れる手段は永遠に失われるだろう。

ISは男性には起動できないらしいが、その常識は垣根には通用しない。垣根に起動できないわけがないのだ。

そして、それはこのあとの『話』で、先方が承諾してすべてを解決せざるを得なくなるので問題はないと確信している。そう。垣根にとってはもう、確定事項なのだ。

そして東としては、世界から隠れるためにわざわざ作った自分の住居かくれがからさっさと出て行ってほしかった。しかし、一方で垣根の超能力に興味を惹かれてしまった。この世界の法則に捕われない物質、ISを超えるパワードスーツの開発。無限の可能性がそこにはあった。

それに、平行世界に存在していたという別の自分とゆかりのある人物なのだ。垣根自身にも若干興味はある。

「……………これから君はどうするの？」

「……………出来ればここにいさせてほしいな……………」

(やっぱりそうきたか……………)

東としては、先ず最初に出てくるだろう要求はそれだと判断していた。そして、それ以外にも要求があるのではないか、と思っていた。

普段ならば、それすらもせずに門前払いをかますところだが、今  
回ばかりは彼とのコネクションがほしい。そのためならある程度の  
譲歩はする方針でいた。

ただ、垣根にしてみれば交渉にもならないだろうが。

「……ここに居座るの早めてほしいかな。第一、ここは私しか知  
らないISの秘密が満載だし。それだけは絶対にはれるわけにはい  
かない」

「そうだろうと思ったよ、クソ科学者……」

「何よ〜!」

「その顔見ると無性に胸糞悪くなってくるんだよ!　つかテメエ

……俺がおとなしく交渉の席につくとも思ってたんのか?」

「……うん、思ってるけど?」

改めて説明しよう。東は垣根が衣食住以外に自分とのコネとある  
程度の技術提携を望んでいるものと思っっている。が、垣根のそれは  
違う。話し合いという言葉を借りた、『警告』なのだ。

「俺は衣食住さえ確保できればそれで良い。ここに居たいつつた  
のは、飽くまで繋ぎだ。まあ、ここに住まわせてくれたり、そうじ  
やなかったとて繋がりを残してくれんなら俺の能力、テメエに提供  
してやるが?」

事情確認の際に聞いた話を垣根は思い出す。恐らくは東はISの  
開発者ということ、かなりそのコネは広範囲かつ強力だろう。…  
…頼らない手はない。まっとうな手段によらなくても手には入るだ  
ろうが、それでは障害を大きく作りすぎる。それはそれで構わない  
が、はつきり言って面倒臭いことこの上ない。

「……それだけ?」

と聞いてくる束に対して、垣根は一撃必殺の口撃をかます。これでもう、相手は逃げられない。

「ああ、こちらの意図はそれだけだ。つーかな……テメエ以外で俺のような厄介過ぎる力持った異端者は誰が世話見るべきだと思ってやがる」

「……………」

あっけらかんと答える垣根に対し、束はこう思った。

(これだけだと私じゃなくても興味は惹かれさそう……妙に枯れた子ね……。でも……この子……中々やるわね)

束は垣根が言っていた、超能力の基本的な情報を思い出す。

超能力行使の基本は演算。<sup>データマター</sup>未元物質という異質を生み出す能力は演算が必要。既存の法則に未元物質の法則を上書きするには時には逆算も必要ということは容易に予想が着く。…………つまり。

ISのコアの材質、理論などを知ることなど造作もないということだ。そしてそれをもとに第二の開発者になることさえ可能ということでもある。

あまつさえ、コアの製造方法をばらす恐れもあるだろう。

垣根が言った通り、本人は交渉の場に着く気などさらさらない。

これは脅迫……いや。警告だったのだ。

側においておかなければ世界を引っ掻き回す、という。

この男を放っておくわけにはいかない。さっきはさっさと立ち去ってほしいとも思っていたけれど、それは危険過ぎる。

数分間考え、束はその結論を導いた。だが、それすらも間違いだ

「たつたこのあと気付かされる。」

「ああ、あんなことは言つたけど別にあんたが懸念していることは保険だ。こつちの要求をテーマが飲まざるを得なくするためのな。安心しろ。俺がほしいのはISの開発技術じゃなくて、操縦技術なんだからな。ただ……ISを寄越さなければ似たようなことにはなるだろうけどな」

留めの一撃。

やつとここで束は気付いた。その能力ばかりに気を取られて、まゝんと煙に巻かれた。

そう。垣根が真に欲しかったのは、女尊男卑社会における、<sup>アドバンテージ</sup>特別性だったのだ。そして、自身とのコネを残しておけば能力を提供するとはつまり、何か問題が起きた時の最終手段<sup>ほけん</sup>。

確かに現在の自身の住居兼ラボこののであれば、その問題がなんであれ、隠れみになるかもしれない。

常人であればこの場合、垣根に恐怖と疑念を向けるところだろう。

(本当にやるな、この子……)

だが。垣根くらいの歳で、それくらいの知能を持つ存在。自身と対等に渡り合える存在。

束は、まるで新しい玩具をもらった子供のような怪しい笑みを浮かべていた。

**交渉という名の脅迫、もとい警告……を保険にしてくださいました要求（後書き）**

6/25 行き詰まったので改稿しました。

垣根がよりダークになった気がする……。

垣根、改心……？（前書き）

改稿前のものを知っており、尚且つそれが気に食わないと感じられた方々へ

一度部分削除してやり直しましたが、それでも食い違いが起こっている部分をご容赦ください。

なお、敢えて話しを随分飛ばしています。千冬の戦いはほぼ全面カットとしました。理由は……ご想像にお任せします。

垣根、改心……？

「……何と言うか……この視線は流石の俺でも耐えられねえ……」

と、垣根は呟いた。

垣根と、垣根の一つ前の席の男子生徒に向けられている視線。それは、他のクラスメイト全員の視線だった。理由は垣根も考えるまでもなくわかった。

(俺と織斑以外は全員女子だから……)

そう、垣根たち二人以外、この教室どころか、学校の何処を探しても男性はいない。

ここは本来ならば、男子禁制の女子校なのだから。

そもそも、垣根が何故女子校などにいるかと言えば、垣根がIS操縦技術を取得したいと言い出したところに起因する。

垣根がこちらの世界に来て数日後、束が出した結論は至って単純だった。則ち、『ISの操縦技術なら、IS操縦者の養育学校に入っちゃえば問題ない』とのこと。因みに特筆すべきはその話をする前に、全て手回しを完了している束であった。

『入学するにしても具体的にどうする』と垣根が聞くと、束に『ていどくんの話は通してあるからこの学校にこの時間までに行つて』と言われた。そして、その指定された学校が、日本国立の、IS学園という学校だった。

そして、校門前に居た教師に『お前が束が言っていた、二人目の

男性操縦者か……。とりあえずついて来い』と言われ、ついて行けばそこで試験だと言われ、突如IS同士の戦闘になったのである。能力全開で挑んだため、たったの一分も経たずに終わってしまったが。

因みに、ISこそ殆ど使っていないので、合格にしているものかどうかとは思われるが、教師陣は見事に勘違いをして、垣根自身の能力を『そういうISなんだろう』と判断してしまったとか。

そして、東の無茶苦茶な手回しでその試験の日に試験官を勤め、彼の保護者にならざるを得なくなった織斑千冬に実家へ行くよう言われ、とりあえずは寝泊まりするところもないので指示に従い、今に至るといわけである。

(それにしても、入試の日の、あの手回しのよさ……。きっと話し合いかからその次に俺の要求についての話をした日までの数日間。その間にすべてことを運んでいたに違いねえ……。度々思うが性格や傾向どころか、やること成すことすべてがマッドサイエンティストと似通ってやがる。違いは……。最後だな。あいつは俺の後は意外にも学校の一教師に落ち着きやがった……。絶対にありえない転職だったなあれは……。つかあの性格じゃ絶対向かないと思うんだが)

的確な推測で最も苦手で嫌いな天才科学者の行動を当てた垣根は、無駄な思考を捨てて、この視線にどう対応すべきか、第二位の頭脳をフル回転させて考え始めた。

(……。まあ、普通に考えて、悪質な視線は殆どねえ……。値踏みするような視線が約一名分感じられるが……。まあそいつは様子見だ。



無視無視)

そして二秒で結論が出た。

因みに垣根は知らない。向こうの世界の篠ノ之束は、その後、とあるウニ頭の少年が通う学校で教師を勤めることになったことを……無論、垣根にとっては知る必要すらないし、知っても何の意味もないが。

平行世界、学園都市。とある高校にて。

「つくしゅん！ ……………？ 誰かが私の事を噂しているのかな……」

とある物質干渉系能力専攻の教員が、盛大にくしゃみをし、その原因に何の根拠もない仮説をぶつくさと呟いた。

そこへ、小学生くらいの、年齢不詳の教師と、女性なら誰もが羨むようなプロポーションをジャージで台無しにしている教師が現れて、質問してきた。

「どうしたのですかー、篠ノ之先生」

「あれ？ 篠ノ之が風邪って珍しいじゃん」

「別に何も。風邪じゃないと思う。ただ、私が直々に開発した能力者君が私の事でも話しているんじゃないかと思って」

「そうですか……」

「にしても毎度毎度随分と冷たいじゃん……」

天才は勘もいいのだろうか、垣根の行動を遠からず当てていた束であった。

### 閑話休題

さて。今日は登校初日。垣根達一年生にとっては、入学式という一大イベントがあった日である。

そして、彼等の現在地は冒頭でも触れたとおり、IS学園の一年一組のホームルーム教室だ。今現在、名前順で自己紹介をしているところなのだが。

垣根は早くも、らしくない行動に出ていた。

(……この際、無視するのが一番無難だな。つか自己紹介ね。どう説明しようか……。人とまともに接することって本当に三、四年振りくらいだな……)

と、気持ちが悪いくらい真面目に、クラス、というよりは表社会に馴染もうとしているのだ。

理由は……無駄な戦闘を避けるためである。

垣根としては別段、戦闘に負けそうだという気はない。能力を使えばほぼ誰でも圧倒できることは学園都市の時と変わりないと判断している。だが、だからどうした、と垣根はそれを一蹴した。

ここは学園都市ではない。平行世界だ。そして、そこで自分の価値観で動けば最悪世界を敵に回しかねない。そうなれば、最終的には自分が勝つ可能性が高いとは言え、そのために割いた労力に見合うだけの利益が得られるとは限らない。

学園都市で『第二候補』と知った時に上層部に全面戦争をしかけた時のような、ある程度の気に入らない理由があるなら躊躇いなく全面戦争とさせてもらうが、何の理由もなくそれを起こす引き金を引く気はない。トリガー

それならば、と垣根はもう霞んで殆ど思い出せない、表社会での生活を再び始めることにしたのだ。

尤も、多くの命を奪い、血みどろになった自分にそんな権利があるとは思えないが、と若干自嘲気味にもなっていた。

さて、自己紹介の内容を考えていた垣根は、ふと顔を上げると先ほどから行われていた自己紹介が止まっていることに気が付く。

「ああ？ 何で自己紹介が止まってんだ？ …… って、ああ、そういうことが」

そしてそれは、目の前の人物を見て、すぐに納得した。

（こいつ……フリーズしてるな。取り合えず進まないから声かけるか）

「織斑……織斑……」

トントンと肩を突いて、垣根は周囲の視線にフリーズしていた一夏を元に戻す。一瞬一人の女子に意識を向けかけた一夏は、しかし直後に自分呼んだ垣根に移した。

「何だ？」

「自己紹介だ。今はお前の番だ」

「そうか……わかった」

そして、一夏の自己紹介が始まった。

「……………えっと、……………織斑一夏と言います。よろしくお願  
いします……………」

そして、口を開いて十秒未満。視線に当てられた一夏は早くも口  
を閉ざしてしまった。

全員が、『もっと色々喋ってよ』『これで終わりじゃないよね』  
といった視線で一夏をガン見している。

垣根は特に何を思うでもなく、一夏をただ見ていただけなのだが。  
一夏はそんな教室を一回り見渡して、窓のほうに一度注意を向け  
た後で絶望したかのように再度教室を見渡して、

垣根と視線を合わせた。

「……………垣根」

「あ？」

「……………助けてくれ」

沈黙の数秒間。

長い間深い暗部に所属していたがために、そういった助言は出  
来るはずもない。自分は表社会でどう振る舞うべきかでさえ頭をフ  
ル回転させる必要があるのだし。というよりはそもそも、今回は助  
言を求めるべき場面ですらない。

結論。

一夏のヘルプコールに、垣根はこう返した。

「他力本願過ぎるだろうが！ 絶望しろコラ！」

「は、薄情者」

「つかよ、俺は今までそれ程人付き合い良くなかったんだし助言で  
きるはずねえって」

「マジかよ……」

そんなやり取りをしていると、垣根は一夏に近寄る黒いスーツ姿  
の女性がいることに気付いた。

「織斑千冬……いや、ここでは織斑先生か？」

「意外だな……。初見の時のお前に対する印象からはその呼び方は  
まずありえないと思っていたのだが……」

「まあな。こちらら色々思うことがあるんでな」

「そうか。……で、お前は挨拶も碌に出来ないのか」

千冬の言葉に一夏は反論をしようとした。

「いや、千冬姉、俺は」

が、垣根の対応を見ていなかったのか、何時もの呼び方で読んで  
しまったのがまずかった。

パン、と叩かれてしまったのだ。

「垣根を見ていなかったのか。『織斑先生』と呼べ」

「……はい」

そういうと、千冬は副担任 山田真耶と名乗った へ移した。

「織斑先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けて済まなかったな」

「い、いえ。副担任ですからこれくらいはやらないと……」

それを聞き流し、千冬が教卓前に移動して自己紹介をし出した。

「さて諸君。垣根が私の名を言ってくれたが改めて自己紹介する。  
私が織斑千冬だ」

垣根はそれをもいいと言わんばかりにただ呆然と聞いていた。

## IS学園での学生生活1（前書き）

警告。

今話以降、徐々にキャラブレイクが入っていきます。

原作キャラと比べ、キャラに差異が出てきますので、ご注意ください。

## IS学園での学生生活1

「で、あるからして、ISの基本的な運用については現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

現在、二時限目の授業を受けている最中である。科目はISの法規関連である。

のだが、垣根は一時限目からやる気をなくしていた。何故なら、既にISはその最奥部、コアに至るまで全て解析済みで、知る必要がないからだ。

故に、法規関連以外は、殆ど知る必要がない。

法規に関しては、この世界で、IS操縦者になる以上は知っておいた方がいいか、と思ったからか、まともに聞いている。人知れず、世界崩壊の危機が若干遠ざかった瞬間だった。

因みにその理由、垣根は出来る限りは暗部組織スケールのリーダーとしての自分を殺して表のルールに従おう、という活動方針を持ち始めたからだ。もつとも、決意というものには程遠いものではあるが。とにかく、そのルールに従う上では法規もきちんと知っておいたほうがいい、と思ったのだ。

さて、そうは言っても、その授業を聞いて、垣根はその全てを理解しきった。レベル5の脳みそは伊達ではない。千冬から渡された参考書は全て読みきって、頭の中で反芻、それを情報から知識へと変えるのに三日足らずで終えてしまった。

(しかし、織斑にも渡してあるとは言ったが、家にそんなもん、俺が渡された奴以外にはなかったな。まさか、古い電話帳と間違えて古紙回収業者に渡したとかねえよな?)



必読とかいてあったのだからさすがにそれはないだろうと思いな  
がらも、前の席に意識を向ければ。

何故か隣の女子の様子を伺うかの如き視線で注視していた。

その視線に気付き、用件を聞こうとした女子の問いに、「あ、い  
や。何でもないんだ」と、謝っているところを聞くと、垣根は理解  
出来ているのか、と判断した。

だからこそ、教諭達の質問に対する一夏の答えを聞いたとき、驚  
くことになった。

「織斑君、何かわからないところありますか？」

「えっと……」

（あ？ わかるんじゃないかねえのか？）

「何かわからないことがあったら聞いてくださいね、何せ私は先生  
ですから」

（……こいつ、絶対生徒に馬鹿にされやすいタチだろ……）

と言う考えは飲み込んで、垣根は事態の結末を見届けることにし  
た。

一夏は一度教材に視線を落とし、内容をよく読んで。

「先生！」

「はい織斑君！」

「ほとんど全部わかりません！」

教室内に、一瞬沈黙が流れた。

「え……。全部、ですか……？」

山田は引きつった顔で、教室全体を見渡して、こう言った。

「え、えつと……お、織斑君以外の人で、今の段階でわからないって人はどれくらいいますか？」

教室中見渡しても、誰一人手を上げない。どうやら、わからないのは一夏だけのようだった。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

垣根は思う。これは絶対読んでいない、と。織斑家ではただの一目も、もう一冊の参考書を見たことがなかった。

「……古い電話帳と間違つて捨てました！」

パン！ 出席簿が閃き、一夏の頭を寸分の狂いなく捉えた。

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者！」

「ごめんなさい」

「あとで垣根に見せてもらつて、一週間以内に覚えろ、いいな」

「い、いや一週間であの厚さはちょっと」やれと言っている「はい、やります」

頭を抑える一夏を捨て置いて、千冬は垣根の元へ来た。

「お前はどうかんだ、垣根」

「俺をこのクソガキと一緒にすんなよ」

「……そうか。ならばいい」

そついうと、千冬は再び教卓前に戻って言った。

二時限目が終わり、休み時間になった。  
垣根は一夏と話をしていた。

「なあ垣根。流石にクソガキはねえだろ」

「なら三下だな」

「もっとひでえだろそれ！」

「参考書を捨てるのが悪いんだろうが。諦めて絶望しろ！そして五日間で覚える！」

「いや無理だから！一週間でさえ無理があるってのに五日である分厚い本」

「ちよつと、よろしくて？」

二人でそんな感じでぎゃあぎゃあ騒いでいると、一人の女子が話しかけてきた。

「へ？」

「あア！？」

が、会話に水を差されたことに機嫌を損ねた垣根が暗部にいた頃のようなどすの聴いた声で返事をする、話しかけてきた女子は、顔を引きつらせて、「ひっ」と若干ひるんだ。なんだかんだと一夏に言っていたが、結局のところ垣根は一夏との会話を楽しんでいたのだ。

「おい垣根！ そんな反応返したら怖がるだろう！」

「あ？ すまねえ。ついな。で、俺らに何の用だ？」

垣根の態度が普通に戻り、緊張から解き放たれた女子は、今度は

わざとらしい態度で二人にこういった。

「まあ、何ですの、そのお返事。私に話しかけられるだけで光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないですか？」

ピキピキ……。垣根の不機嫌指数が、急上昇し始めた。心なしか、ひびが入ったような音が、一夏には聞こえた。

「ごめん、俺、そもそも君が誰か知らないし……」

「私を知らない？ このセシリア＝オルコットを！？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

ピキキキ……。さらに不吉な音が聞こえる。垣根の様子を伺いつつも、何とかこのセシリアと言う女性に地雷を踏ませないためにはどうすればいいか考えながら、口を開いた。

「……垣根、代表候補生って何だ？」

「……はあ、織斑、お前マジでねえわ。俺でさえもうそれくらいはわかるつてのによ。国のIS操縦候補者に選ばれたいわゆるエリートって奴だ。例えばこのクソ女みたいにな」

「な……クソ……って……」

選択を間違えたか！ と、垣根の最後の言葉に、一夏は緊張した。取り敢えずは、暴れないように、垣根を落ち着かせようとして、

「垣根垣根、落ち着け！」

「至って平常だ三下。ムカつきはしたが、テメエの馬鹿さ加減にすつ飛ばされた。興醒めだ」

予想外の返答に若干へこんだ。そこまで見下すか、と。

そして、ほつと胸をなでおろす一夏をよそに、垣根が会話を進める。

「で？ そのエリートさんがしがない男性操縦者達に何の用なんだ？」

「え？ あ、えつと……そう、そうですね！ 私は優秀ですので、貴方達のような人間にも優しくしてあげましてよ？」

「例えばESについてわからないことがあれば泣きながらひざまずいて頼み倒せと」

「う……ま、まあ、そこまでしてくれるなら考えないことも無いと言つことですね。なにしろ、私、入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリートですから」

話の先導権を奪われ、セシリアはやりずらそうに、しかしまだわざとらしく自身を誇張して話してくる。その態度は、既に垣根が遊びに入っていることなど毛頭気付いていない。

「ならお前は十五秒以内に倒したと。流石はエリートさんだな」

え？ と、セシリアが垣根を見る。

「織斑千冬に聞いてみな。このクラスの中で、例外と言つのをなしに真に速かったのは誰なのかとな」

「まさか……まさか、貴方も倒したと言つのですか！？ しかも、その言い方ですと十六秒で!？」

「ああ。本気出してたら三秒くらいで終わったがな」

「出鱈目ですわ!」

セシリアの言つことは、もっともだろう。一夏も、そんなことありえるはずがないだろ、と流石にセシリア側に回った。だが、垣根

は不敵に笑い出した。ありえない。

しかし、垣根が言う事実は真実なのだ。何故なら。

「テメエがどう思おうが知ったこっちゃねえが……一つだけ覚えとけ。俺にテメエの常識は通用しねえんだよ、クソボケ！」

そう。垣根にはそんな、三秒で勝負が着くはずがないと言う常識が通用しないような力を、確かに持っているのだから。いまだに信じられない顔でセシリアが口を開くも、

「……まさか、本当だと言うのですか」

「だあから言っただろ、織斑千冬に聞けと」

「……………」

垣根が既に証人を掲示していたことを思い出し、セシリアは黙り込んでしまった。そして、ありえないような目で、垣根を見た。

三時限目の予鈴がなるまで、その沈黙は続いた。

## IS学園での学生生活2 不良学生ていとくん

チャイムが鳴り、我に帰ったセシリアは『ま、また後で来ます！』と慌てて元の席に戻った。

それとほぼ同時に教室のドアが開き、千冬と山田が入ってきた。

「それでは、この時間では実践で使用する各種装備の特性について説明する。……ああ、そうだ。その前に、再来週に行われるクラス対抗戦に出場するクラス代表を決めなくてはな」

（対抗戦にクラス代表と来たか。女性にしか扱えねえIS、それを例外的に扱える、全学年を探してもただ二人しかいねえ男性IS操縦者の俺達。女尊男卑の風習とそれを象徴するようなさつき女の傲慢な態度……面倒臭えなことになりそうな予感しかしねえ……）

直感的に垣根はそう思った。ただ、珍しい男だから、というだけの理由でクラス代表候補に祭り上げられ、それに納得がいけないという女子に難癖つけられる。その後のことについて、あれこれと思索する。一夏の性格を踏まえ、反発するであろうセシリアの罵倒が来た際に彼がどう対応するのもかも予想して、自分好みの結末はどんなものであるかを考える。

「クラス代表というのは言ってみればクラス長のようなものだ。生徒会の開く会議、委員会への出席。因みにクラス対抗戦と言うのは入学時点での各クラスの実力推移を測るためのものだ。一度決めると一年間は変更出来ないからそのつもりで」

ザツ……。そんな擬音が聞こえそうなほどの早さで、殆どの生徒が垣根、もしくは一夏に向いた。

「私は織斑君がいいと思います！」

「私もそれがいいと思います！」

「私は垣根君がいいと思います！」

「同感です」

最後のはかなりのほんとした推薦であつたが、とにもかくにもこれまで垣根の予想がほぼ現実となつてしまった。

「では候補者は織斑と垣根。他にはいないか？ 自薦他薦は問わない」

(これでほぼ確実に面倒事が起きるな……。まあ、俺らしくもねえことする羽目になるが、しなくてもいい仕事するのだけはごめんだからな。ここは説得と言う名の脅迫といくか)

垣根がそう行動計画を立てている(因みにポーカーフェイスのため千冬には悟られていない)と、パンツと机を叩く音が聞こえてきた。

「納得いきませんわ！」

Side 帝督

ここまで予想通りになるとはな。

クラス対抗戦とかのイベントは実践を積むのにいいだろうが……。それだけだ。確か入学前に織斑千冬に聞いた限りじゃアリーナを使って模擬戦をすることはほぼ毎日可能なようだ。それを差し引けば、あとは面倒事の塊だし、避けたいところだ。

まあ、まずはこの女を黙らせるか。



「おい、セシリア＝オルコット。何が納得いかないか聞かせてもらおうか。よもやクラスで一番強い奴がクラス長になるべきだと言うつもりか？」

「そうですね！　そしてそれはこの私！」

この際トップがどうなのかはどうでもいい。まあ言うまでもなく俺だろうが、こいつにそれを言うと話が進まないだろうからな。ここは肯定して、適当に返しておくか。

「例えそうだとしても理由がそうだとは思えねえ。テメエ、もしかして俺達が男だから選ばれたってのが不服なだけじゃねえのか？」

「なっ……いいえ！　断じてそんなことはありませんわ！」

「そうだといいがな。だが、俺らを選んだテメエらも問題だ。テメエらが俺らを選んだ理由を言え。じゃなきゃ俺はその推薦を却下する。男だから他クラスの注目を集めそうだ、とか言うのならやっぱり俺と織斑に対する推薦は却下する」

『え！？』

クラス中が、信じられない、と言う顔で俺を見てくる。が、一人だけ違う目で俺を見てくる。

「おや。あなたは結構物分りがいいようですね。極東の猿でもたまにはそういうことに頭が回るものなんですね」

「カマかけて露骨に肯定と受け取れる反応見せる奴にだきや言われたくねえな。まあ、極東の猿はムカつくが、今は気にしたら負けだ。」

「……何故か、短時間しか話していないのに、無性にキャラが崩れているような気がします」

「安心しろ、自覚はある。だが俺は正直、クラス代表はごめんなん

でな」

俺とセシリア、オルコットが話をしていると、織斑千冬が話しかけてきた。

「垣根、邪魔だ。座れ。オルコットもだ。それと垣根の言っていたことは却下「却下だ！」なっ……。いい加減に……。む……。っ！」

出席簿で俺の頭を叩こうとしたようだが、生憎と俺にそれは通用しねえ。伊達に暗部で六年間仕事してきたわけじゃねえからな。

教室中が驚いたような顔で俺……。正確には俺の背中を見てくるが、大したことじゃねえ。未元物質（のうりやく）を発動しているだけだからな。

「……。どういうつもりだ？ こんなところで部分展開など」

「テメエの却下を俺は却下する」

「そんなこと」

「わかったな？」

最大限の殺気を込めて、織斑千冬の視線を見据える。この殺気はこいつに対してだけのものではない。

そしてこいつは歴戦を潜り抜けてきただろうから気付いているはずだ。俺は本気だと言っことを。

「……。お前、何者だ？」

「俺はテメエに言う義務も、権利も、義理も、心遣いも持ってねえ！ 知りたきゃクソ科学者にでも聞くんだな。で、どうする？ 教師としての義務を果たすのか？ それとも無理を押し切るのか？」

あいつにも俺が暗部に属していたことは言ってねえからな。何も出ないはずだが。

教室の面子は、突然俺が発した殺気に顔を青ざめさせている。気絶している奴も何人かいるな。

「……………くっ、仕方が、ないか……………。いいだろう。」

お前の意見にも一理あるしな。致し方あるまい」

「わかってくれてよかった。俺に残酷なことさせる奴じゃねえって信じてたぜ？」

「……………ふん。余計な世話だ墮天使。……………ということだ。織斑と垣根を推薦した者と、自己推薦した者はその理由も添えるように」

だが、俺が発した殺気に当てられたことで、こいつらはもうそんな余裕がなくなっている。これじゃ話がすすまねえな。しかたねえ、精神に作用するような未元物質を空气中に注入しとくか。

S i d e   セシリア

「はあ、はあ、はあ……………」

なんですか、さっきのあの男の雰囲気は……………。息が、碌に出来ませんでしたわ。

まだ頭が酸欠状態で、状況が飲み込めていませんが、わかることが一つ。私は一つ、誤解をしていたと言うこと。

垣根帝督という男……………只者ではない、ということですよ。

事実、他の人が気付いたかどうかはわかりませんが……………織斑先生が……………あの『ブリュンヒルデ』が圧されていた。

もしかすると……………たったの三秒にしてこの学園の教師を倒してしまふということも十分ありえるのではないか、というほどの実力を持っているかもしれない、と思えてしまふ。それ以上に興味を引い

たのは、世界一のIS操縦者……つまり、世界一強い女性である織斑先生にすら屈しない何かを持っている。

何にも屈することがなく、それどころか話の先導権を剥奪して有無を言わせない発言力。

怖い、というのもあった。けれども、私の父と比べてみて、強い、と思えるくらいの何かを感じた。

知りたい。

彼のことを、もっと知りたい。

だから、私は……。

S i d e o u t

そして。

数分が立ち、未元物質によって、その大半は精神が元に戻り、授業に復帰できるようになった。だが、彼女達が負った心の傷は深く、しばらくは垣根には恐怖で話しかけることも近寄ることも出来なかったと言っ。

そして、クラス代表については、結論が決まった。

未元物質の効力が始める直前に、セシリアと千冬の会話によって。

当の垣根は『仕方ねえ、やってやる』と、しぶしぶと了承したそうなの。

### IS学園での学生生活3 一夏の受難回避劇

放課後。一夏は教室で机に突っ伏していた。

「うう……。い、意味がわからん。何でこんなにややこしいんだ」  
IS関連の専門用語の羅列に、早くも音をあげているのである。  
教室にそんな一夏が居ることを視認した山田が、一夏に話し掛けた。

「あ、織斑君。まだ教室にいらしたんですね。丁度良かったです。」  
「はい？」

書類片手に立っている山田に顔を向ける。

「えっとですね。寮の部屋が決まりました」

そう言って紙切れと鍵を渡された一夏は、しかし何か疑問に思った。確か寮が決まっていなかったから一週間は自宅から通学だと言われたはずだ、と。

それが、放課後になっていきなり寮が決まった……。どういうことでせう、と、その疑問を山田に問い掛けつつ、頭を悩ませた。

「はい、そうなんですけど。事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理矢理変更したらしいです。織斑君、その辺りのことって政府から聞いてます？」

それを聞いて理解した。

政府とは無論、日本政府である。どうやら、『世界でただ二人だ

けしかない男性の『IS操縦者』の片割れということで、政府も保護と監視の両方を付けたいということだ。

実際、一夏も垣根も各国大使やマスコミや拳げ句の果てには遺伝子工学研究所の所員から『生体を調べさせてほしい』とまで言われていた。

「……わかりました。でも、荷物は一回家に帰らないと準備出来な  
いですし、今日はもう帰っていいですか？」

「それなら私が手配しておいた。まあ、生活必需品だけだがな。着  
替えと携帯電話の充電器だけあれば十分だろう」

「……」

「娯楽も必要だろう、漫画とかゲームとか。という考えを一夏はぐ  
っと飲み込んだ。下手に要求すると出席簿アタックを喰らいかねな  
いからだ。」

「では時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、  
寮の一年生用食堂でとってください。因みに各部屋にはシャワーが  
あり、大浴場もあります。けど、織斑君は使えません」  
「え？ 何で？」

千冬が心底呆れた顔で言う。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか」

「言いたいことがやっと伝わったのか、一夏は慌てて千冬の言葉を  
否定した。」

絶対にそういうのは倫理的に好ましくないだろうから。

「い、いや、入りたくないです」

その場にいた全員が、それくらいは常識だろう、と言つ目で一夏達を見ていたが。どう空気を読めばそれをそんな風に認識できるのか、歪曲した認識をする人物が一人いた。

山田である。

「ええっ？ 織斑君、女の子に興味がないんですか！？ それはそれで問題のような」

その上、その言葉を聞いた女子達が出て、その女子達がそれを真に受けてしまい、次々と偽りの情報が伝播してしまった。

「……………はあ……………。全く……………どうしたらそういう勘違いが出来るかねえ」

「全くだな。山田君の思考回路がどうなっているのかつくづく気になる。ではな、織斑」

そういつて千冬は去っていった。垣根を誘って、一緒に寮に行くうとしていた一夏はいつの間にか空席となっていた垣根の席を見て、先に行ってしまったのかと、そう当たりをつけた。

そして、千冬の言葉を聞いた山田が、慌てた様子で一夏に辞した

「あ、じゃあ私達は会議があるのでこれで。織斑くん、ちゃんと寮に帰るんですよ？ 道草くっちゃ駄目ですよ？」

山田もそう言い残して去り、残された一夏は、『どうやって道草食えっというだ』と心の中で突っ込みをいれながら、今日一日の疲れをとるべく、寮へと向かい始めた。

あー、死ぬかと思った。

つかなんだよ！ 木製のドアを木刀で貫通するとかどういう技術があれば可能なんだよ！ ありえなさすぎる！

ズズズ……という音が聞こえてきて、ドアから木刀が消えた。ほう、諦めてくれたか、良かった。

俺は今、寮の自室の前で、座り込んでいる。寮の部屋が相部屋で、しかもそのルームメイトが今日再会したばかりの幼馴染みだった。しかも、相手はシャワーから上がったばかり。

何故部屋にいるかと聞かれて正直に答えたのに、帰ってきたのは木刀による攻撃。俺、何か悪いことしたのか？

ズドン！

まさかの第二波だと！？

そこ、数秒前まで俺の頭があったところだぞ！

「本気で殺すきか！ 今のかわしてなかったら死んでるぞ！」

「なにになに？」

「あつ、織斑君だ！」

「えー、あそこが織斑君なんだ！ いい情報ゲット！」

騒ぎを聞いたのか、次々と女子が集まってくる。

何というか、全員ラフな姿だな。中には際どい服装の人までいる。正直、目に悪い。

「織斑？」



不意にかけられた声の方を見てみれば、そこには垣根がにいた。しかも、飄々とした態度で。……こんな目に悪い光景の中を平気で歩けるなんてうらやましい奴だ。

「自室に入ってベッドに座って休んでたらシャワー浴びて出てきた幼馴染みと出くわした」

すると、垣根は俺と扉の穴を見て、こういつてきた。

「……おめでたい奴だ」

軽く皮肉を言われてしまった。

……そういえば、垣根見て気になってたんだが、垣根とセシリア、なんか急接近してないか？　なんか妙に今日の昼頃から妙に仲良かったし。いや、あれは一方通行か。セシリアがいくら話しかけても、見事に飄々と受け流していたし。

「参考書だ。……命運を祈ってる。じゃあな」

うん、家に来たときから思ってたんだけど、垣根は淡泊だよな。そんなだと友達出来ないぞ。

後ろ姿を見送った後、俺は俺と箒の部屋の（穴が開いた）ドアを見て、溜息を吐いた。

さっきのことがあって気まずいけど、事情を話さなくては何も始まらない。取り合えず、入るか。

「箒、入るぞ？」

「……………入れ」

ぶつきらばうな返事を聞いて、俺は部屋へ戻った。  
さて、事情を説明しよう。

「筈……」

「何だ」

う。睨まれた。射殺でも出来そうなくらいに鋭い。

「その、さっきはごめん、な？」

「……。ふん、まあ、故意ではなかったのだしな。だが！ 次はな  
いと思え」

「……はい」

うん、ここでいいえと言えば自分の命が危くなる。そもそも次  
がないようにするというのは当然のことだろう。

「で、お前が私の同居人だというのか？」

「おう。そつらしいぞ」

また睨まれた。比喻して言うならよく磨がれた真剣そのものだ。

「ど、どういつつもりだ？」

「へ？」

「どういつつもりだときいている！」

「まあまあ！ 確かにうら若き男女が同居するなんていかわしい  
よな、確かに」

ここは垣根を真似して先導権をとってみよう。このままいくとま  
た木刀が飛んできそうだ。回答をミスって。

「そう、そうだ！ 男女七歳にして同衾せず！ わかっているではないか！ ではどうしてなんだ!？」

篤は俺に言葉を奪われたのか、若干戸惑いながらも次の句を言いつてきた。さっさと答えたほうがよさそうだな。……俺が望んだのか、って思われてたら困るし。

「俺がそうしたいって言ったわけじゃないぞ？ 山田先生から渡された紙の通りの部屋に入ってきただけだからな。それがなけりゃ俺もすつかり一週間の間、自宅から通学のもりでいたし」

「む？ そうだったのか。ということは望んだわけではないのか……」

どうやら和解できた見たいだ。うん、話の先導権はやっぱり握ったもの勝ちか。でも垣根には遠く及ばないなあ。

あれ？ 篤の顔がなんか浮かないって感じた。何でだ？

「………………。一夏。この部屋で過ごす上で線引きが必要だと思わないか？」

「うん？ まあ、そうだろうな。さっきみたいなのはもう御免だ」

「私だつて御免だ！ それではまず、シャワーの使用時間だが、私は七時から八時、一夏は八時から九時だ」

え？

「…………俺、早い方がいいんだけど」

「わ、私に部活後そのままにいるというのか!？」

篤が部活動つていうと剣道部か？ ……あゝ、なるほど。確かに女子に汗かいたあとそのまま待っているのはきついわな。……

あれ？ でも待てよ、確か……。

「部室棟にシャワー設備ってなかったか？」

「わ、私は自分の部屋でないと落ち着かないのだ！」

む。そう言われると言い返せない。俺だって自宅のトイレの方が学校のトイレより落ち着くしな。

……あれ？

「ここって個室にトイレないんだな」

「あ、ああ。それがどうかしたのか？」

これは最早ピンチだ……。ここは完全に女子寮と同義だ。当然共同トイレも女子トイレしかない訳で……。最悪そこに入るしかないのか……。ん？

「そうだ、垣根がいるじゃん！」

「何だ急に！」

「いや、な。意外なことに、トイレ何処使えば良いのかって問題が出てきてな。流石に寮のトイレ使う訳にゃいかないだろ？」

「……意外だな。一夏なら、最悪の場合女子トイレに駆け込もうとするかと思っただが」

「はっはっは。まさかあ」

渴いた笑い声をあげる。すぐに嘘とばれるけど、すぐに次の句を言えば問題ない。

「垣根なら何か掴んでるかもしれないと思ってさ。それに、わかんなくても先生に聞きゃわかるし」

「それを聞いて安心したぞ」

「それはよかった」

その後は特に問題も起きず、昼間、一時限休みの時以降話せなかった分、十一時頃までたっぷりと話し込んだ。

因みにトイレについては山田先生が、伝え忘れていたと過剰な謝罪付きで言いに来てくれた。

#### IS学園での学生生活4 ていとくん風事情説明会？

教室で一夏が突っ伏しているのを見て、垣根は若干同情した。

(まあ、ごく普通の奴がこんな専門用語の羅列を理解しろってのがそもそも無理な話なのか?)

垣根自身は別にそれほど難しくも感じられなかったが、やはり特別な条件もなく、本当にただの偶然でここにいるだけの一夏にとつてはまさにそうに違いない。

垣根もISを知ったのは数週間前、それもISの存在すら知らなかったのだが、彼は偶然にもその開発者の住居で目が覚めて、さらにその超能力によってISの細かい部分まで事前に知り尽くしてしまっている。残すは法規と操縦技術だけという、つい数週間前までこの世界の常識すらも知らなかったのに現在はリードしまくっているという、特殊な状況だ。

だが、もし自分が一夏と同じ状況であれば、やはり自分の性格上、早くも音上げてしまうことだろうことは少し考えれば予想がついた。それも、品行不良になりかねないだろうことも。

「帝督さん」

「オルコットか。どうした？」

「いえ。その、帝督さんは寮の部屋はどうなのでしょう？」

「調整がつくまでは織斑家の世話になることになってる」

「……はい？ あの、貴方の家は」

「わけありなんだよ。悪いか？」

「いえ、別に」

実は垣根、セシリアの急激な態度の変化に、結構混乱していたり

する。

（なんでこいつ、ここまで俺に対する接し方が変わりやがった？  
たしか、クラス代表が俺に決まる少し前からだったな）

その時のことを思い出してみる……が、とくにそうなる要因が見  
つからず、やはりわけがわからない。

代表を決めている時に垣根が暴走した後、いち早く復帰したセシ  
リアは自らの自薦を放棄して垣根を『教員を僅か十六秒で倒す実力  
者なのだからこれほど相応しい人はいない』という理由で推薦し、  
一番それを知っている千冬はセシリアの推薦を承諾。垣根に確認を  
とると、本人もやりたくはなかったものの、自分が蒔いた種であっ  
たので却下することもできず、渋々『仕方ねえ、やってやる』と承  
諾した。まあ、この時点ではまだ確定ではなかったのだが。

授業の終了間際に再びクラス代表を議論するも、セシリアの推薦  
に反対する人が居なかった（というよりはする気力すらなかったの  
だが）為にクラス代表は垣根に決まったというわけだ。垣根がセシ  
リアの視線の変化に気付いたのはこの時だった。

垣根はセシリアの自らに対する接し方の変化について5分くらい  
悩んだが、結局答えは見つからなかった。

（ま、考えるだけ無駄か？）

そんな垣根の元へ歩み寄る人物が一人。

「垣根、ちょっといいか」

「織斑先生か。何の用だ？」

「お前の部屋が決まった。部屋の都合上、オルコットと同室だった

から不安に思ったが、その様子なら仲良くやってくれそうだな」

「わ、わたくしが、帝督さんと同室!？」

「一々驚くことかそれ……。女子高生つてのは一々そんなことで驚くのか……。で？」

「夕食は一年生用食堂で六時から七時まで、大浴場は使用禁止だ」

間違った理解をする垣根を千冬は見事にスルーして、説明を続けた。垣根も垣根でそのスルーに触れず話を進める。

「意外と夕食早いんだな。てか大浴場？ 周りの状況見りや寧ろ使用可能な方がおかしいだろ。いちいち言うなよそんなこと」

「お前なら大丈夫かと思っただが、念のためだ」

(そんなに信頼されても困るんだがな)

千冬は鍵と紙切れを置いて去っていった。教卓付近にいるということは、まだしばらくは教室にいるということなのだろう。

再びセシリアと垣根は話し出した。

「しかし、調整がつくまでしばらくは自宅からの通学と言われたのでしたよね？」

「そうだな」

「少し急過ぎるとは思いませんか？」

「ああ。だが現状からすれば可笑しくない。常識で考えればすぐにわかる。」

「常識、ですか……」

若干考えるような顔をしながら、セシリアは垣根の話に耳を傾ける。

「そうだな。世界で二人だけの男性IS操縦者。例えばお前が研究



者だったらその異物をどうする？」

「え……………なるほど、そういうことですか……………」

自身が研究者だったら。その問いをされ、IFの自分を思い描いてみるセシリア。なるほど、確かにいかなる手段を尽くしても隅々まで調べあげたいと思うだろう。

「そういうことだ。そしてそれを防ぐための保護、という名目の監視ってわけだ。ま、俺も無駄な死人は出したくねえからな。上層の対応には一応感謝するけどな」

「無駄な死人？」

「死者に口無しって言うだろ？俺は自分の敵には容赦しねえ。珍しいからってただ絡んで来るだけの奴は許せるが、研究対象として実験体にしようとする奴には容赦しねえ」

「……………、午前の授業中の事と言い、今のことと言い、貴方は本当に恐ろしい意志と思想の持ち主ですわね」

（ですが。そこまでして自身の意志を貫き通す強さには惹かれるものがありますね……………）

等と若干誤解の含まれる解釈をするセシリアであったが、それに垣根が気付くはずもない。

「さて。少し早いが寮にでも行くか」

「そうですね……………。それもいいですわね。いろいろとお話したいですし」

「俺は話すことないんだがな」

ぶっきらぼうに答える態度にセシリアはもうすっかり慣れてしま

っていた。

それぞれ荷物をまとめて寮へ向かった。

寮へ向かう道中。セシリアは不意に、あることが気になり、垣根に話し掛けた。

「帝督さん」

「何だ？」

「帝督さんは部活動、何部に入っていますか？」

「部活動、か……」

（そっぴやそんなものがあつたんだつたつけな。別に強制、というわけではないらしいから入る必要はないか……いや。そうとも限らねえか）

入る必要はない。結論を出しかけて、ふとその結論を飲み込んだ。思い出すのは、先程セシリアと話した、寮が決まったことに関する理由の事だった。

「入る気はない……というか面倒臭いから入りたくないんだけどな。今日のような状況を見るに……何らかの部活動に入っていた方が後で面倒事にならなくて済むだろうな」

セシリアは何か訳あり顔でそんなことを言うのを見て、何だろっかと黙考する。やがて導き出した答えは。

「面倒事……また、常識で考えればということでしょうか」  
「まあ、そんなところだ。モノや個人の趣味嗜好にもよるが、珍しいものを自分の近くに置いておきたくなるのは人の心理って奴だろ  
う？ 男に免疫のないこの学園の生徒には特にそれが顕著に出るだ  
ろうな」

部活動対抗争奪戦を誰かが考えつきそうだと、垣根は自分なりの  
考えをセシリアに話した。

「まあ、この学園の生徒が殿方に慣れていないというのには納得い  
きますが……そこまで発展するのでしょうか」  
「逆に聞くがな、飢餓に悩む中で目の前を餌がうるちよろしいで、  
それを奪い合わない獣がどこにいる？」

そんなことを言われてしまえば答えようがない。確かに、的をい  
ている推論だ。

「………………。貴方の賢さは信じられませんわ。本当に人間です  
の？」  
「さあな。人界に迷い込んだ天使かもしれないねえぞ？」  
「…………三時限目の帝督さんを思い出すとそう思ってしまう兼ねませ  
んわ」

随分な言いようだ、と垣根はらしくない微笑みを浮かべた。

その後、セシリアが是非一緒にテニス部に入ってくれと強く願望  
したが、垣根は涼しい顔でこれを拒否した。

因みに、後にボロボロのセシリアが、暗部時代と比べてかなり丸くなつた垣根のそっけない心遣いを受けながら空手道場から出てくるのを連日目撃され、学園中に『恋仲説』が流れてしまつのは別の話である。

……疲れた……。新学期初日からこうでは先が思いやられる。全く……。本当に上層部の意図を感じそうだ。

だが……。毎年馬鹿ばかりが集まって来るのは良いが、今年はそればかりではなかったな……。垣根帝督……。奴は馬鹿ではない……。歴戦を越えた『プロフェッショナル』の気配を入学前からヒシヒシと感じていたが……。何者なんだ、あいつは。

今は夜。既に職務時間は過ぎている。

私は昼間の垣根のことがどうしても気になり、彼を紹介してきた張本人に電話で聞くべく、携帯電話を片手にしていた。

束が電話に出るのを待ちながら、垣根について、考える。

昼間、垣根が発した殺気……。私に対してのものだけではなかった……。生徒に向けての殺気でもあった……。

しかも、奴は本気だった……。私があの時、首を横に振っていたなら、恐らく何の躊躇いもなくその羽を振るっていた……！

「……っ……！」

そこまで考えて、私は背筋が凍るような感覚を覚え、胸を抱いた。端的にいえば……。私は垣根に、恐怖を感じているのだろう。純粋な、死の恐怖。実際、あの時冷や汗がかなり出ていた。あの空気を味わって、私は珍しくも、長い間思考が感情に流されつつあるのを自覚した。

決して、真っ向から敵対してはならない、と。

敵対すれば容赦なくあらゆる手段で潰しにかかって来るだろう。

目的のためには手を選ばない。例え大切なものを盾に使おうとも。そういう輩とは幾度となく真っ向から向き合ってきた。

だが、垣根は別格だ。下手をすれば……あらゆる手段を講じて私や私の周りを消しにかかって来るかもしれない。

そうならないよう、対策は打っておくに越したことはない。

P r r r ……ガチャ

やっと繋がったか。

『やあ。待たせてごめん、ちーちゃん。そろそろかかって来る頃だと思ってたよ』

ん？ 気取られてたのか。まあ、奴を紹介して来たのは電話の向こう側にいる束むすぶだ。何かしら予想はしていたのだろう。

「……こちらのことは何でも御見通しということか。相変わらずだな。話が早くてすむ」

『うんうん、わかってるよー。ていとくんの過去についてだよね』  
「そっだ……。奴は一体……何者なんだ？」

単刀直入に聞かれてしまった。こちらが質問する立場なのだがな……喋ってくれる分には構わないか。

『正直いうと私にも彼が何者かはわからない。強いて言えば、彼はこの束さんにすら、とてつもなく反則級と言わせるほどの超能力を持っているということがーっ』

「なに……超能力、だと？ ふざけているのか？」

超能力など、あるわけがないだろう。

『でもね。理論だけ聞いてみれば、この世界でも超能力者を量産できることには変わりないと思うよ？ 私も彼に聞いて初めて知ったんだけどね。あれはシュレディンガーの猫理論を応用すれば、基礎理論なんて簡単に出来てしまえる程度のものなんだって』

なんだと？

シュレディンガーの猫は、有名な理論だ。私もほんの少し知ってはいるが……しかし、それをどう応用すれば超能力の理論になりうるのだ？

全く予想が付かないな……。だがあの束だ。そんなこと、現実のものに出来てしまえるかもしれない。

……それにしても妙な言い回しも言っていたな。

「今、『この世界でも』と言っていたな。この世界でない、別の世界で既に開発されているのを見たような感じだな、その言い方は」  
『おー、流石はちーちゃん、鋭いね。もう気付いちゃったみたいだね』

なに？ ……そういえば先程、『それが一つ』と聞いていたな。なるほど。垣根にはその胡散臭い事実以外にもまだ何かある、ということがあるか。

『そう。それこそが、ていとくんの二つ目の秘密。彼は平行世界における過去からこの世界に何らかの原因で飛ばされて来たらしいん

だよ』

「……………束……………」

『ん？ なに？ そんな哀れむような声で』

「いや、何と言っかな、」

まさか、そんな空想癖が束にあったとは……………。さすがにそれはないだろう、束。

「心配するな、束。IS学園ご用達の病院は精神科もやっている。大丈夫だ。多分何とかしてくれる」

『うーん……………信じられないかあ、さすがに……………。でも、私はそれは事実であり、真実であると確信している。事実、彼の口からはこの世界にない事象ばかりがでてくる。超能力を数式で確立とか、東京の三分の一の敷地をもつ事実上の都市国家とか、全人口の八割が学生の街だとか。因みに私謹製の嘘センサーには反応なかった。つまりは……………』

「ごまかしではない、ということだな」

嘘センサーか。奴のことだ、そのセンサーは本当に実在しているだろうし、性格からしてその性能は折り紙付きだろう。

そしてそこまでした彼女がそこまで言うのならそうなのだろう。私としても幼なじみを信じてやりたい。

……………しかし、だとすれば。

私は、彼はどうせ束が下らん知性を持ってたから興味を持って、ISを動かせたから紹介してきたのだと思っていたが……………予想の斜め上とは、正にこのことなのだろうな。

『それからねー。彼について一つだけ注意。多分一度は目にしたと思うんだけど。彼が白い翼を出現させる光景を』



あれはISの部分展開ではないのか？

『この世界にも、彼の出身世界にもあるはずのない物質を生み出し、またはその物質の混入により既存の法則性を塗り替える超能力。あの翼はその超能力の塊だよ』  
『なに！？』

既存の法則性を塗り替える、だと？

ふざけるな。それは則ち、垣根がISに乗れるのではなく……垣根がISを無理矢理乗っ取ったということではないか？ 何と云うことだ。適性もへったくれもない。

「何か……対策を打てないのか？」

私は、今日の垣根の様子を包み隠さず東に話したが。返ってきた答えは、予想外のものだった。

『……いいんじゃないかな？ 泳がせておいて。迂闊に手を出せば待っているのは手痛いしつぺ返しだから。いっくんと一緒にいさせれば、寧ろこの上ないボディガードになり得るしね！』

それもそうだが……。

『彼について言えることはあと一つ。彼は世界を相手取っても十分な勝算があるってところかな。下手に委員会に報告しない方がいいよ？ 容赦って言葉知らないみたいだし』

それには私も賛同する。

そうして、その後も束といくらかその能力の情報のやり取りをして、通話は終了した。

結局、わかったのは彼は常人が切るには危険過ぎる手札でも余裕で切れるほどの強さ（非情さとも言おうか？）があるということ。

対してこちらにはそれがあっても彼には全然敵わない。

結局は、彼にはどうやっても敵わないということしか収穫はなかった。

ならば。彼にこれ以上、今日のようなことをさせないようにするのが、私に出来る唯一の手段だろう。

ていとくん、影で警戒される(前書き)

楯無のキャラがわからない……。

次回から再び垣根メインとなる予定です。

ていとくん、影で警戒される

翌朝。垣根とセシリアは、食堂へと来た。そして、セシリアは洋食中心に、垣根は栄養バランスを考えながら和食を中心に選び、一夏達と合流して同じテーブルに座った。

果たして、その食事の風景はと言うと。

「お前はやはり洋食中心なのだな」

「人それぞれではないですか、篠ノ之さん」

「お前、少しは栄養バランス考えて選べよな。見た目からしてダメだぞそれ。つか、和洋折衷ってどう考えてもバランスが偏るだろ」

「どうだかな。量とかを調整すりゃ問題ねえだろ。あとはどれを選ぶかだけだな。和洋折衷でもバランスが取れるような工夫しているから心配ねえ」

「ですが美にはかけますね」

「ああ。統一感が無いと少し食が進まんのは何故だろうな」

と、垣根がいることで場が重くなるのかと思いきや、実に自然な会話が成り立っていた。

まあ、こんなことで本気に言い争っていても、どうしようもない。まあ、健康管理に関してのみで言えば、存分に討論したほうがいいのだろうが。

とにかく、こうして普通の、他愛もない会話が成り立つということとは、かつて学園都市第二位として君臨していた、『データ未元物質』データと垣根帝督の在り方は、変わりつつあるのかもしれない。

\*

ところ変わって、IS学園某所。

人気がないこの場所に、二人の人物が密会していた。

片方は、垣根が編入することになったクラスの担任である、織斑千冬。

そして、もう片方は。

「それで、織斑先生、こんな時間にこんなところに呼び出して、何の用ですか？」

「更識。お前に一つ、忠告、兼頼み事をしたくてな。できれば、生徒会長としてだけではなく、更識家当主としても聞いてもらいたい」  
「……何事ですか？」

更識家当主、更識楯無という少女だ。彼女は、『更識家』という、対暗部用暗部組織のリーダーである。と、同時に、IS学園の生徒会長でもある。

彼女は、そのことを引き合いに出された途端、数々の修羅場をあるいてきた『ベテラン』の顔つきになった。

それを確認した千冬が、口を開いた。

「お前も知つての通り、今年、ISを扱うことの出来る男が二人、入ってきた。一人は私の弟、もう一人は一応は私が保護責任者と言うことにはなっているが、素性がわからない。ここまではいいか？」  
「……ええ。そして、そこから先のことも予想はつきました。ようはそのうちのどちらかにとつてもない問題がある、と？」

「その通りだ。無論、私の弟の方についてはもう一方の影響こそ受けてはいるようだが、一般人も同然だから危険は無いだろっし、そう思いたくも無い。問題なのはそのもう一方の方だ……。出来るだけ、余計な接触はさけて欲しい。『表』の人間にとつて少しでも過激な取引だったり、さらに言えば諜報も出来る限り避けた方がいい」

淡々とそう言い放つ千冬を見て、楯無は若干疑問に思った。

『あの』織斑千冬が、及び腰になっている。それも、何かに怯えるような、そんな心中をも、感じさせて来る。

それがあまりにも意外で、だからこそそこまで警戒心をあおらせる件の人物に、自身も警戒心を募らせた。

だが……そこまで警戒しておいて、何故みすみす泳がせるのか。

楯無は、その疑問を自然と口に出していた。

「あれには極力接触を避けたほうがいい。お前が『裏』に強いことも知っているが、あれは規格外だ。それこそ、お前のやっていることが、『素人』としか言えないくらいに『玄人』だ。最悪……無理を通せば全てを失いかねん」

「……………、本当、なんですね、それは」

眼を閉じながら、千冬はそう言った。その様子から、嘘を言っているようには思えない、と楯無は判断した。

ということとは、垣根帝督という人物は、それほどまでに、『裏』で名が売れていると言つことになるのではないだろうか。なのに、更識の情報網に引つかからない……いえ、それくらい危険、だからこそ逆に引つかからないのだろうか。あまりにも危険すぎて、情報網に引つかかる前に痕跡も残らずその姿を消し去ってしまうほどに。

楯無が、垣根のことにに関して、思考を重ねていると、それを察したかのように千冬が信じられないことを発言する。

「ああ、あれこれ推測しているようだが、奴の情報がないということを考えているのならそれは当たり前だろう。何しろ、元々奴はこの世界の人間ではないらしいからな」

「え……と………?」

あまりの発言に、思わず絶句。

「……どういうことかしら、それは」

「言葉どおりの意味だ。奴は平行世界……つまり、別の可能性を歩んだ、この世界ではない別の世界の、それもその世界における過去から来たらしい」

「は?」

あまりにも、突拍子がなさ過ぎる。そんなこと、本気で信じろても言うのか? という楯無。

千冬はまたしても、それを読んでいるかのように告げる。

「言うておくが、信じる信じないは別として、私が言っていることは事実だ」

……そこまでいうのなら、本当のこと、なんだろう。

楯無は、どこか納得がいかないと思いつつも、それを事実として受け取ることにした。

「それから、敢えて彼と接触しなければならなくなつたでしょう」

それと同時に、千冬はまた話題を変えた。

楯無も、予想外な上に信じる事ができない事実困惑しながらも必死に話について行くこととする。

「ええ」

「その場合は無理に抵抗はするな。出来る限り安全な妥協点を見出だせ」

「それはまた唐突ですね。どういうことですか？」

「そうだな。……これは、とあるツテから聞いた内容から、暫定的に私がそう呼んでいるだけなのだがな？」

呼んでいる？ なにか、名前をつけないとややこしいくらいのものなんだろうか。

楯無がそんなことを考えていると、千冬が更なる爆弾の投下を開始した。

「奴の保有する超能力のことだ」

「……………、平行世界の次は超能力、ですか」

楯無は落ち着いているわけではない。度重なる非常識な情報に、もうなんとでもなれと開き直っただけである。

そして、そんな楯無に構わず千冬は進める。

「私は、その能力のことを、暫定的にこう呼ぶことにした。『イレギュ異次元物質』と」

「イレギュラー……マテリアル。イレギュラーな、物質……名前から察するに、正体不明の物質を生成、及びその制御、と言ったところですか？」

正直胡散臭い話だ、と思いつつも、それでも本当であったら困るので一応推測はする。

「それだけではないらしい。まず、イレギュラーと言うくらいだから、例えば『あらゆる攻撃を遮断する物質』を生成すれば、こちらの攻撃は通らない。ここまではいいか？」

「ええ」



楯無もそれくらいならば簡単に予想はつくし、信じていることができずとも理解は出来る。

だが、そこまではいいか、と言うことはそれ以上の何かがある、と言うことだ。

楯無は、何が来てもいいように心の準備をする。

「だが、奴の能力に関して、もう一つ注意すべき点がある。いや…  
…こちらの方に気を払っておいた方がいいかもしれん」  
「というと？」

「異次元物質に触れた物質は、独自の法則性をもって、それまでとは異なつた、文字通りイレギュラーな動き方をするらしい」  
「……………は？」

一瞬、楯無は訳がわからなくなった。

(独自の法則性をもって、それまでとは違う動き方を始める。それ  
つて、つまり)

「ああ。お前の考えていることは恐らく正しい。ようは、この世の物理法則の変更……そして、そうなつてしまえば、ISの防御性能など、場合によっては紙に等しくなるだろうな」

実際にはそれどころか、逆にエネルギーシールドを構成している粒子に未元物質ダークマターがに触れることで、エネルギーシールドが有害化する恐れも有り得るから、それ以上に危険である。

楯無はその危険性を考えながら、続く千冬の話に耳を傾ける。

「付け入る隙があるとすれば、奴に集中力を与えない、ということだ。超能力の基本は莫大な演算、らしいからな。逆にいえば、冷静じゃなくさせればいい」

(……なるほど。確かに、それなら付け入る隙は何とかある)

「まあ、付け入る隙があったとして、付け入れる可能性も限りなくゼロに近いから、私は出来れば戦いたくはないな」

「そう、ですね」

「だが、接触を最低限に抑えろと言う理由はそこではない。奴の行動傾向が危険だ」

「行動傾向、ですか」

「ああ」

垣根は非常に気まぐれで冷酷、かつ一度決めた目的に対して手段は選ばない性格だ。そして、自分の敵には容赦をしない。

つまるところ、彼は目的を達成する時、非情な行動をも辞さない、ということである。

「実は昨日、クラス代表決定のときに、奴と交渉したのだがな」

「……交渉？」

「ああ。……クラス全員と、私の命をかけた、一方的な交渉を、な私ですら冷や汗まみれになるほどの殺気を、クラス全体に振りまかれたよ」

「……っ!？」

「そして、断定した。奴は危険だ。危険すぎる。目的のためなら一切の躊躇いをしない、冷酷な奴だ」

それを聞いて楯無も納得した。

クラス代表という、たったそれだけのためだけに、そんな残虐なことをやってのけるそれは明らかに異常だ。

「幸い、奴はきっかけさえなければずいぶんと身勝手だが、ある意

味では大人しくもある。まあ、奴もある程度の分別はつくようだしな。放っておけば何も問題は起こすまい」

「……………そうみたいです。話を聞く限りでは、その子に手を出すのはハイリスクノーリターンって感じしかしない。まあ、珍しい、男操縦者の片割れってことで調べたかったけど、そんな秘密があるんじゃないやめておいたほうがよさそう……………」

「ああ。その方が懸命だ」

今年は、予想を超えるような大波乱に満ちている。

これから起こるであろう、その大波乱に、二人は不安を覚えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2953u/>

---

ISの世界へ未元物質投下作戦！

2011年9月16日09時09分発行